

部活動について

校 長 武井 正明

昨日も大会や練習会、吉中は他校よりも規模も大きく、部活数も多い。身内のことながら、休日にも部活動指導に労をいとわない顧問の先生方に頭が下がります。

子どもたちが輝いたり、勝ったりすると疲れも半減するものですが、疲れしか残らないのが、保護者や子どもとの関係がうまくいかない時です。

幸運にも新採用以来、ずっと指導可能な野球部の顧問。自業自得なのですが、苦しい時が何回もありました。チームが強い時に限って、実はそのひび割れに気づかないことが、ままあるのです。忘れられない思い出があります。

秋に県準優勝になった代です。それは翌春の選手起用についてのクレームが発端でした。当初、エース投手の第2ポジションをサードではなくレフトにしました。そのことが父親は、実はとても不満でした。

ある練習試合で、投球の下半身の切れが悪いので、短距離のダッシュにもなるだろうとサードを守らせた試合後に、父親が「サードはさせないって言ったでしょうが」ときました。私は本人にサードを守らせる意図を伝えてはいたのですが、父親はそれを聞く前に、烈火のごとく、他の親もいる前で、私を罵倒したのです。

私は、虚しさと馬鹿馬鹿しさでいっぱいになりました。

それ以来、その父親の肩を持つ派とそうでない派とに分かれて、結局負けて引退するまで、嫌な雰囲気が続きました。卒業以来、その代の子ども達とは、一度も集まっていません。あの準優勝は、いったいなんだったのでしょうか。

今振り返ると大きな反省しかありません。

選手にとって、ポジションの問題は、指導者が考えている以上に大きな問題だという意識が、私自身に欠落していた点です。私は当時、勝たせることが子どもや親が最も望んでいることであり、それを叶えることが、最も重要なことだと信じていました。しかし、ポジションについて、もっと慎重丁寧に、本人の納得の上で行う意識が、決定的に足りませんでした。

そして「やってあげてるのだ」という意識。

部活動は、親と顧問の、互いを労う気持ちが不可欠です。当時の私には「俺が勝たせてやってんだ」という傲慢な気持ちがありました。強引な指導というのは、大きな成果を出す時があります。それが指導者を、往々にしてカン違いさせるのです。

どんな部活動も絶対に見失ってはいけないのが、主役の子ども達です。今でも当時の子ども達には、合わせる顔がありません。